心の中の桜

下長中学校　三年　小泉　咲歩

日本を代表する木「桜」。私には、思い出深い桜の木が一本ある。

私がまだ保育園生だった頃、毎日見る桜の木があった。その木は、太く、大きく、草原の中にただ一本、堂々と立っていた。春がくると、とても綺麗な花を咲かせ、小さい頃の私でも胸を打たれる程だった。

年長の頃、その時のクラスメートと先生で、その桜の木の下で花見をしたことがあった。みんなでお弁当を持ち寄り、桜の木の下に並び、ひらひらと舞ってくる花びらを眺めながらお弁当を食べたことをよく覚えている。その時の写真を何度も見返すほど楽しい思い出である。

私は、その桜の木を見る度に花見をした時のことを思い出し、以前よりもその桜の木を気にかけるようになった。休日も、家族とその木を見に行く程、その桜の木を好きになっていった。夏になり、葉桜に変わり、秋になり、葉が落ちて、冬になり、葉が一枚もなくなり、春になり、また花を咲かせる。それがずっと続くと思っていた。

ある日、桜の木の周りの草原の木が切り倒された。そして、数ケ月後に、太陽光パネルで埋めつくされた。毎日見ていた自然豊かな景色が、がらっと変わってしまった。

数週間後、また近くの草原の木が切り倒された。そして、太陽光パネルが設置された。その隣の草原も、そのまた隣の草原も、次々と太陽光パネルで埋めつくされてしまった。

翌年の春、私は卒園した。あの桜の木の花は見事に咲いていた。まだ木は残っていたのだ。このままずっと残ってほしい。そう思っていた。弟がまだ通園していることもあり、桜が咲く通りを度々通ることはあった。だが、私が知っている景色とは、変わったところがあった。それは、「太陽光パネル」だった。緑が広がっていた場所が、続々と太陽光パネルへと変わっていった。そしてそれは、桜が咲く広場のすぐ横まで迫ってきていた。

いつものように、弟を保育園まで迎えに行っているとき、運転していた母が、

「あの桜の木、切られちゃうんだって。」

と口にした。聞きたくない言葉だった。当たり前のように見ていた桜がなくなってしまう。そう考えると、とても悲しい気持ちになった。

一カ月後、いつものように弟を迎えに行った。だが、見える景色は変わっていた。綺麗な花を咲かせていた桜の木は、切り株すら残らず、跡形もなくなっていた。その場所には、太陽光パネルを設置するための大きい器具が置かれていた。

今でも、保育園からの友人や、両親との思い出話で出てくる桜の木。「太陽光パネル」という私たちの生活に役立つものへと移り変わった。桜の木が無くなった悲しみはもちろん大きい。私以外にも、そう思っている人はいるだろう。心の寄り所となった桜の木が、今までより多くの人々を支えていく。そう考え、あの場所をこれからも大切にしていきたいと思う。あの桜は、これからも私たちの心の中で咲き続ける。